日本健康心理学会

ヘルス・サイコロジスト

Health Psychologist

No.53 2010年12月

アングル

第23回大会の基調講演を聞いて

第23回大会委員長
江戸川大学教授 柴田良一

2010年9月11日・12日の両日、日本健康心理学会第23回大会が江戸川大学主催で開催され、メインテーマ「よりよく生きる――真の豊かさをめぐって」の下に、二つの基調講演が行われました。

基調講演Ⅰは、ロンドン大学キングスカレッジのジョン・ウエインマン教授による「慢性疾患患者の疾病認知とQOL」でした。疾病認知という研究領域は、わが国の健康心理学者にとってはなじみの薄いものでしたが、ウエインマン先生の豊富な研究成果から、詳細かつ具体的な話を聞くことができました。

まず、疾病認知に関するレヴィンタール（Leventhal）の自己制御モデルをはじめとする理論とモデルについて、次いで、このモデルに基づく心筋梗塞患者への介入と認知の変容とその有効性について、明快に説明してくれました。

さらに、患者の非アドヒアランス問題への疾病認知理論に基づく介入などの研究について、携帯電話のSMSを用いた喘息の治療例をもとにしたお話がありました。

これらの研究で用いられているIPQ（Illness Perception Questionnaire）については、ウェブサイト（http://www.uib.no/ipq/）に公開されているので、興味のある方は参考にしてください。また、ウエインマン教授が編集した“Health Psychology second edition”がBPS Blackwellより刊行されているので、こちらも参考になさるとよいと思います。

教授は多忙なスケジュールのなか、日本健康心理学会のために来日されましたが、この夏の異常な猛暑に体調を崩され、講演後すぐに大会会場から帰らざるをえなかったことを、残念に思っておられました。また、日本で健康心理学が大変盛んであることに感銘を受けておられましたが、このことについて私自身は考えさせられました。

基調講演Ⅱでは、祖父が斎藤茂吉、父が斉藤茂太という赤光会斉藤病院院長の斉藤章二先生が、「臨床家とQOL」という演題で講演をなさいました。

講演では、臨床の中で患者を理解することがいかに重要であるか、ということについてご自身の入院体験、PTSD体験からお話をしてくださいました。鮮烈な体験に基づくお話はとても興味深く、話が進むにつれ、会場におられた多くの会員に強いインパクトを与え、それぞれの臨床家としてのあり方に大きな示唆を与えたのではないかと、会場の片隅にいた私は強く感じました。

なお、今大会は都心を離れた千葉県流山市にある大学での開催ということから、主催者としては発表件数・参加者数等に大変心配しましたが、会員の皆様のご協力をいただき、成功裏に終えることができました。この場をお借りして、厚く御礼申しあげます。